

**染谷：**ンティア団体の代表を務めております。この団体は、平成16年、17年にかけ、「次世代育成支援島田市行動計画」を行政が策定したときに、市民参加の協議会の委員を務めたメンバーたちが、自分たちができることを何か自分たちの手で形にしてみようってということからはじまったボランティア団体です。まず、最初に私たちに何ができかって話をしたときに、「公民館や公会堂を使って歩いていけるところに親子の集いの場をつくろうよ。自由に、いついってもそこで人に会えるような場所をつくろうよ」というところから、活動がスタートしました。

しかし、やっていくうちに、次々とこんな支援もあった方がいんじゃないのとか、こういう人たちとも連携できるよねっていうことが増えてきました。今は次世代育成支援ネットワークの正会員は24名ですが、それぞれの地域で、活動を支援してくださっている地域ボランティアの方たち70名ほどにお手伝いをいただいております。こんな支援があったらいいというのは、例えばお洋服やら本やらおもちゃやら、まだまだ使えるものいっぱいあるのにもったいないなと思っている人たちと、それを今欲しいと思っている人たち、ともに大勢いらっしゃるのにつなぎ役がないと。だったら自分たちがそこをつないで、自分たちでまだまだ使えるいいもの集めてきて、そして今それを欲している、必要としているところにお分けしよう、お届けしようという活動もそうでした。

それからもう一つは、子どもがほしいのにまだ生まれない人に対する支援です。子どもをもたないと子育て支援を受けるスタートラインに立てないんですね。だけど実際には子どもがほしくてできない、なかなか赤ちゃんが生まれないという方はたくさんいらっしゃいます。その人たちには、不妊治療の補助金制度しかないんだけど、もっと心というか、気持ちをサポートしたいとの思いから、「お母さんになりたい応援団」という形で、不妊治療を経験して赤ちゃんに恵まれた人たちがスタッフになって、これから赤ちゃんがほしいと思っていらっしゃる方たちを応援したい、そういう活動もしております。

今日は、「きしゃぼっぽ」の活動を中心に、お話ししたいと思います。

「きしゃぼっぽ」というネーミングは、島田市内にSLが走っていて、そのSLが走っていく駅を、私たちの集いの広場「きしゃぼっぽ」にたとえて、さらにたくさん駅が増えてつながっていくといいなというイメージで名づけています。先程「きしゃぼっぽ」に携わっているスタッフは約70人とお話ししましたが、そのうち大体50人、約7割は50歳代以上の人たちです。あとの3割、20人くらいが20代30代40代の方たちです。今日は子育て支援に参加しているシニアの立場から発言をさせていただきたいと思っています。シニアはどのくらい子育てに参加したいと思っているのか、どんなことをしたいと思っているのかを、まず最初のイントロとしてお話させていただきたいと思います。

まず、親世代の子育てを助けてあげたい、見守ってあげたいと思ってっしやるシニアの方で大勢いらっしゃると思うんですね。ただ、なかなかそのきっかけをつかめないとか、自信がないとか、そういう理由で一步踏み出せない方が多いのではないかなと思います。確かに、子育ての仕方も昔と違いますが、価値観も違うし、なかなか口を挟めない、子育てに対する考え方が違うとおっしゃる方もいます。あるいは昔はお口の中でかみくだいてから子どもにあげてたりしたけど、今のお母さんは虫歯菌が移るって言って、自分の赤ちゃんの唇にキスすることもしません。そのくらい今と昔では子育ての仕方が違っている。他にも例を挙げればたくさんできてきますけど、子育ての仕方が違うとなかなかアドバイスもできないという方はたくさんいます。きっかけをつかめないのは、一步踏み出す勇気がないとか、あるいは自分は男

だから、子育てでなんとかか、あるいは、私は何の資格もないからとても子育てで支援なんて無理とか、子どものことあんまり好きじゃないからなど、いろんな理由があると思います。果たして本当にそういう人たちは子育て支援ができないのかというと、決してそんなことはないかと私は思っているんですね。

後ほどゆっくりお話をさせていただきますけれども、イントロダクションとして、シニア世代は、いま子育て中の親御さんたち、お子さんたちをどんなふうに支援したいと思っているのか、仲間にも聞いてきました。いくつかありますのでご紹介したいと思います。

まず一つ目は、「初めての子育てで不安がいっぱいのお母さん方を助けたい、子育てで孤立しないようにしてあげたい」という強い思いを聞きました。

二つ目は、「地域に住む人の顔が見えて、安心して子育てができる環境をつくってあげたい」。これも皆さんがもっていらっしゃる思いでした。「地域のみんながあなたの方の子育てを応援しているよ」という思いを届けたいとシニア世代の多くが思っています。

三つ目には、小さな弟妹、赤ちゃんを連れて、そして上の子の手を引いてっていうようなお母さんが来た時に、下の赤ちゃんを抱いていてあげるだけでも上の子としっかり向き合って遊ぶ時間をつくってあげられる。つまり「育児の経験、負担を軽減するようなお手伝いをしてあげたい。ちょっとの間赤ちゃんを抱えていることだって、私たちにできること」というような意見がありました。

四つ目には、「子どもたちに声をかけてあげたい。親以外の大人と接する機会をつくってあげたい」。今のお子さんたちは、親としか話をしない。幼稚園、学校に行けば先生と話すけど、地域の大人となかなか話す機会がないというお子さんが多いです。そういう中で、やっぱり子どもたちに声をかけて近所のおじさん、お婆さんの思いも伝えたいという意見がありました。それから、「安心して思いっきり遊べる場所をつくってあげたい」という五つ目の意見がありました。見守ってあげたい、安心して地域で外遊びできるように環境をつくってあげたいというような意見がありました。

六つ目には、「子育てに悩みや不安や焦りを抱えているお母さんたちがいるなら、お母さんの今のその気持ちに寄り添って話を聞いてあげたい、必要なら公的な機関や専門機関・NPOを紹介してあげたい」という思いも聞きました。

七つ目には、お父さんが帰宅するまで、夜10時11時までお母さんは誰も大人と話す時間がない、機会がないという方も大勢いらっしゃいます。身近にそういうお母さんがいるなら、「お母さん方の話し相手になってあげたい。友達づくりの場を提供してあげたい」そんな思いも聞かれました。

それから八つ目には、子育て中の方たちにはなかなか子どもを連れて出かけられる場所がありません。ですから、「赤ちゃんを連れて出かけられる場所を提供してあげたい」という思いもありました。

九つ目には、子どもの数が少なくなってきましたので、お母さんたちは子育てを学ぶ場がないんですね。ですから子育て支援の場を通して、先輩のちょっと先行くお母さんたちを見て、こんなふうに叱るんだ、こんなふうに言葉掛けするんだ、こんなふうにしつければいいんだっていうような子育てのノウハウを学び、不安があれば先輩ママに聞いていただくとか、そういう子育てを学ぶあう場所を、提供してあげたいという思いがありました。

十番目に、「頑張っているお母さんたちを、認めてあげたい。いっぱい声をかけてあげたい」という思いがありました。お母さん方は安心できる言葉掛けをしてほしいとよくおっしゃいます。こんなに頑張っているのに誰も

私のこと褒めてくれないと言います。そういうお母さんたちに「頑張っているね、それでいいんだよ」って声をかけたい、そういう思いがあります。

そして最後に、地域の情報や子育て支援の情報が、地域に住んでいてもなかなか届いていない若い人が多いですから、そういう方たちに情報をつないであげたい。こんなことが子育て支援の現場から、シニア世代が、親世代にしてあげたいと思っているという意見の中で多く聞かれました。

しかし、私たちは何かお手伝いしてあげたい、親世代を助けてあげたいという思いだけではなく、子育て支援を通して自分の心が満たされたり、人の役に立てる喜びを感じたり、生きがいとかやりがいといったものを感じています。自分のために子育て支援ボランティアをしているのかって、それが本音なのかと思うときもあります。私の方からは、そのくらいにいたします。

**漁田：** ありがとうございます。シニア世代からのご意見でございました。次に親世代のほうのご意見を伺いたと思います。神谷さん、お願いします。

**神谷：** こんにちは。私は今湖西市、去年の3月まで新居町だったところに住んでいます神谷尚世といいます。37歳で、この中で一応一番若いです。そして、4人の子どもがいて、小学校4年生の男の子、2年生の女の子、年中さんの女の子、2歳の女の子、4人の子育てを毎日しています。そして、平成15年からNPO法人「ポレポレ」を立ち上げまして、子育て家庭の家族支援をしています。

家族支援といえまでも、父さん母さん子どもたちが一緒に参加してもらって、みんなで楽しい活動をしています。リズム遊びをしたりだとか、工作をしたりだとか、歌を歌う、踊ったり、そして体操する、そういった活動です。この活動をするきっかけになったのは、私が第一子の息子を産んで半年後のときに大病しまして、はしかにかかったんですね。そのはしかが原因で、歩けなくなってしまったんですよ。今は歩けるようになったんですけど、何千に一人かの「急性散在性脳脊髄炎」という病気にかかって、そのときに3ヶ月入院することになり、その結果勤めていた母が休職したりだとか、息子と遊ぶ人がいなかったりとか、そういった経験をしました。地域の中で子どもが暮らしていける環境とか、お母さんが困ったときに助けてもらえる環境があったらいいなということで、平成15年に仲間と「ボレボレ」を立ち上げて、そして平成17年に法人化しました。

今は、新居を中心に270人の子どもと、そのご家族が参加していただいていますので、クリスマス会なんかをやると300、400人位の方が集まり、みんなで楽しいことをします。その中に、20家族に1家族くらいおじいちゃん、おばあちゃんと参加する家庭があります。その家庭の理由は、例えば父子家庭であつたり、お母さんがお仕事をされていて昼間おばあちゃん、おじいちゃんが子どもを育てているとか、理由はさまざまです。そのおじいちゃん、おばあちゃんと、若い世代のお母さんたちが一緒にってリズム遊びをするんですけど、全然違和感はありません。今のシニア世代の方はですね、50代、60代の方は、若いお母さんとコミュニケーションをとるのがすごく上手で、私たちなんかも教えていただくことがすごく多くあります。活動に参加してくれたおじいちゃん、おばあちゃんは、若いお父さん、お母さんを褒めてくれるんです。「子どもを育てるのは今この複雑な社会の中で大変だけど、あんたたちよくやってるね」とかの声をかけたりだと、「こういことができなかったのにこんなことができるようになってすごいね」って子どもを褒めてくれるのもそうですね。お母さんたちには認めてくれる、褒めてくれる存在がとても貴重で、それをお母さん方にしていただくことで、子どもたちを褒めることができるようになるんです。それと、何か困ってい

たときに、「大丈夫だよ、今にできるようになるよ」って励ましてくれる、そういったシニア世代のおじいちゃん、おばあちゃんの関わりが、とても地域の中で重要になっています。

だからといって、おじいちゃん、おばあちゃんがとてもすごい存在っていうわけではなくて、おじいちゃん、おばあちゃんの中でも「うちの子これができないんだよね」なんてぼやいていただくと、余計に身近な存在になります。ママたちがおじいちゃん、おばあちゃんと一緒にご飯を食べたりすることも多くなってきますし、子どもたち同士も一緒に遊ぶことがすごく増えてきています。



しまだ次世代育成支援ネットワーク 代表 染谷絹代氏

二つ目には、子育て支援として劇や折り紙やお料理をつくっているシニア世代のボランティアさんがいらっしゃいます。その方たちは、お料理をつくってくださる、地場産品のものを使って子どもたちに食べさせたいからといってつくってくださるんですけど、ママたちは楽しんでおいしいものをみんな一緒に食べれる場を提供していただけるので、とてもうれしいです。ママたち、食べるのが大好きなので、そういった場を設けていただけるととてもうれしいです。そして、それプラス子どもたちに向かって、「かわいいね、この子となると幸せだねえ」なんて言ってもらえると、ママたちはとても幸せな気分になります。

そして三つ目。「ホレホレ」の活動の中でも、地域の福祉施設と関わるという活動があります。デイサービスのおじいちゃん、おばあちゃんのところについて、一緒に巻き寿司づくりの体験をしたり、この間はお雛様フェア、ひな祭りフェアといって桜餅を一緒につくったんですけど、そこにいくと子どもたちがとても生き生きとします。何でかというと、子どもたちの中には同じくらいの子どもたち同士でコミュニケーションが取れない子たちもいるんですね。でもそんな子達でも、おじいちゃん、おばあちゃんのところに行くと、何もかも認めてくれ、何もかもが褒めてくれ、たくさん体に触れてくれたりだとか、頭をなでてくれたりして、子どもたちがとてもいい顔になります。なので、触れてもらう、褒めてもらう、言葉掛けをしてもらえるというデイサービスに通っているおじいちゃん、おばあちゃんとのコミュニケーションがとても重要だなあと考えています。

そして四つ目、染谷さんからもあったんですけど、地域の中の声掛けです。例えば新居に住んでいるうちの隣のおじさんが、いつも嘘か本当かわかりませんが、「尚世さんきれいだね」っていつってくれるんですよ。それってとてもママはやる気になるんですね。「お洗濯頑張ってるね、今日もきれいだよ」っていつってもらったりだとか、あと「子どもたちがすごく挨拶できるね」とか。地域の中で褒めてもらうとか認めてもらう場所があると、とてもお母さんたち、外へ発信する力が出てきます。

道路で遊ばせるのが怖いになって思うお母さんとかでも、家の前の道の  
ところでおじいちゃん、おばあちゃんに見守られながらだったら一緒に遊